

## 波多野毅さん講演会に寄す

スタッフ山田成子ちゃんとは不思議な因縁である。

幼い頃からアトピーで死ぬような苦しみ悲しみを経験し、どうしようもなくなかった時、ある人に出会った。それで、起死回生の地を北海道に求め、そして今まほろばで、必死に頑張っている。

その壮絶な体験をして来た成子ちゃんとまほろばとの縁。その余りに共通の知り合い、出会いは奇跡のようで、ビックリするのは私ばかりではないだろう。

まほろば主人



# 「成子ちゃんは不思議な子である」

①

成子ちゃんが最初北海道に死ぬほどの決意で移り、初めて長沼の農家さんに住んだ。その時に出会ったAさん。その彼女が、その直前にまほろばに来て、私と画家のおじさんのことを話し合ったばかりだった。それは『続倭詩』の「無我の画、無私の詩」で取り上げた上杉克也さんであった。知的障害施設で最



期を迎えられた、その描く絵の無心のすばらしさは仏さんに通じていた。その何事もない

ような縁が、成子ちゃんを引き寄せ、初めに扉を開いてくれた。

②

さらに、長沼から治療も兼ねて白金温泉の「山辺の家族」に移って懸命に働いた。偶々、そこはまほろばと卸取引があり、まほろばの商品を使っている所だった。そこに不思議な導きの糸を感じる。

③

それから、成子ちゃんが、セミナーで熊本の山奥で出会った人とまほろばで劇的に再会するのだ。その人こそ、阿部一理先生だった。

何とその人こそ、私を自然食に導き、オーリングテストを教え、ついでに家内まで紹介してくれた大恩人だったのだ。このまほろばで、



出会いの数珠繋ぎが、スタートした。

④ 成子ちゃんが、熊本にまだ居た頃、ある方から「阿蘇のみゆきさんに会った方がいいヨ」と言われたという。



それが、阿蘇ではなく、北海道のまほろばで出会うことに。「池末みゆき女史のライアーコンサート」が、ここでであると知った時の驚き。これもシンクロか。だが、これだけではなかった。

⑤ それは、あの教育カウンセラーの緒方紀子さんだった。彼女はご主人と同じく高校の体育教師、テニス部の指導で全国大会に学生たちを引き連れ、時には欧米の大会にも参加させるほどの指導力はあるほど、全国に名群を抜き、全国に名が轟いていた。その緒方さんが、寄りによって、成子ちゃんの通う柳川高校にテニスを教えに来ていたという他ない。まほろ



ばと縁の濃い緒方さんが、である。

⑥ その柳川と言えば、3年前、30周年記念祭の時、大貫妙子さんの歌に合わせてみんなで唄った「この道」。作詞は、北原白秋。彼の生地は柳川であった。彼は、札幌の円山から大通りの時計台に向けて散策した際に浮かんだのがこの「この道」の詞であった。熊本は心の故里、札幌は第二の故郷。その繋がりに自

分が居る、と涙ながらに合唱した。

⑦ そんな中で、まほろばが長年取引のあった阿蘇のアンナプルナ農園の正木さん。その奥様がここ山の手にご実家が。そしてご夫婦して歌い、話された時に参加した成子ちゃん、熊本と札幌の深い繋がりを感じない訳にはいかなかった。



⑧ その成子ちゃんのお母さまが、何年前にまほろばにいらした。お父さまは、造園業。何か趣向が似ている。そして、ご夫婦して共通の趣味は骨董であった。私も古いものに惹かれるたちで、ご一緒に骨董屋に案内した。お母さまは、目敏く李朝の民具を即買われた。その時、目利きの鋭さを感じた。年齢の似通った者同士が、同じ趣味というのも、きっと古いにしへに通じるものがあるからだろう。

⑨ かように、因縁の有る山田さんが最も影響を受けたのが、T A O塾の波多野毅さん。氏から「伝説の女」と名付けられて、笑いに替えてくれた彼こそ、まほろばに最も近いのかもしれない。成子ちゃんが橋渡ししてくれたご縁。きっと何かが待っているに違いありません。

是非当日、波多野先生の心に響く名講義を聞いて頂きたいと思います。

そして、山田成子さんの苦難の峠を越えて来た努力にエールを送りたいと思います。

柔らかく、  
たおやかな人、  
「T A O塾」  
波多野毅さん  
に出会って



まほろばスタッフ 山田 成子

**出会いは私が27歳の時**

20歳から27歳まで、私はアトピーで引きこもっていました。

何度か治療のため家を出ても、なかなか心の自立はできず、実家という守られた環境の中から一歩踏み出すことができませんでした。

頭で考える思いとは裏腹に、心はSOSを出していました。家において守られた環境にいるはずなのに免疫力が下がり、頻繁に口唇ヘルペスが発症していました。



私は、心の中に「家を出たい」という気持ちがあったことにはうすうす気づいていたけれど、気づかないふりをしていました。  
ある時、弟に「昔の姉ちゃんに戻って…」と泣かれました。

「これも私なのに、なんでこの人は泣いているのだろう…」

感情をうまく表現できずにいた当時の私は、弟の言葉が心に届かず、ただ聞いているだけでした。

月日が経って、とうとう心の声を無視できなくなりました。

とにかく家を出ようと思い、インターネットで自分も行けるところを探しました。

引がかかったのがTAO塾。「たのしく、あかるく、おもしろく」をモットーにしている、アトピーの人も受け入れていました。

それからTAO塾に連絡をしても、いつもつながらない。メールを送っても2回スルー。3度目の正直!!と思い、メールに「これで最後にします」と言葉を入れて送りました。3回目のメールでやっとつながりました。

それが、後に私の人生に大きな影響を与えてくれた波多野さんとの出会いです。

## 波多野さんの無茶ぶりはいつも突然。

それまでの私は、自分に自信が



なく、やりたいことも人に言えず、人とかかわることも避けていました。

暗い私に、波多野さんはいつも「いきものがかり」の歌をノリノリで歌ってくれて一緒に歌おうと誘ってくれていましたが、知らない歌なので乗れませんでした。

TAO塾に来て、色んな経験をさせてもらいました。

一枚一枚手作りで焼くポンセン、朝のミーティング、そして農村体験での中学生受け入れなど数知れません。

波多野さんの無茶ぶりはいつも突然です。

「2時間後に教え

子連れてくから3人分の料理作って」と言われたり、農村体験の子のお弁当作り、夕飯のカレー作りと、今まで家族以外の料理は作ったことがなかった私にとってハードルが高いことばかりでした。

そんな波多野さんの口ぐせは「頼まれ事は試され事」。

今思うと、この時の頼まれ事が私を強くしてくれ、北海道まで来れた原動力になった切掛けの一つのような気がします。

ある日、農村体験の子供たちにお弁当を作っていた時の事です。

メニューの玉子焼きを焼いたことがなか



った私は、「焼いたことがありません」と伝えたところ、周りの人は驚きつつ、引いてしまいました。

波多野さんも一度は目を丸くしていたものの、大きく笑い、「なりちゃん は伝説の女だ!」と笑いに変わってくれました。

その時、どんな自分でも受け入れられる波多野さんに救われました。

もう一つ、農村体験の

子供たちの夕飯づくりで感じた出来事があります。カレーを10人分作り、2、3人の子供たちが「おいしい」とおかわりをしてくれました。その姿が嬉しくて、一瞬にして肝っ玉母さんのような気持ちになり、「いっぱい食べてね」と言って、自分の中にある母性を感じた瞬間がありました。波多野さんとの出会いで、自信がなかった私はこんなにも変わる事ができたのです。

## 人の喜びを自分の事のように喜ぶ人

波多野さんは当時大学院に通っていました。二人のお子さんもつシングルファーザーでもあり、TAO塾代表でもあり、大学院生として忙しく動きまわっていました。

ある時、大学院で波多野さんが専攻している「紛

争心理学」の授業に一般の人も参加できる機会があら参加しました。

身近にあるご近所トラブルなど、色々なトラブルを想定して、そのトラブルを参加者で再現しながら、様々な職業の人がそれぞれ意見を出し合い話をしました。

いつも私は、的を得ていない発言やチンプンカンプンな事を言うため、その日はなるべく発言せずに、みんなの話を聞く事にしようと思っていました。

ちょうどTV中継も入っていて、そのプロデューサーの人が新婚さんで、「奥さんの歯を磨くときの音が気になって仕方ない」という相談になった時の事です。

「じゃあ、一緒に歯を磨けば音が消えるから、気にならなくなるんじゃないですか」と、私がポロっといった発言に、みんなが拍手をしてくれました。何も考えず、ただ言った言葉なのに、私の方はポカーンでした。

それから波多野さんは会う人会う人に、そのことを話すのです。なんで自分の事じゃないのに、こんなに嬉しそうに話すのだろう？というも不思議でした。

今思えば、波多野さんは人の喜びも自分の事のように喜ぶのだと思ひ至りました。

今年の3月に大分でアトピーの人のために宿を開いたTAO塾の卒業生の事も、自分の事のように喜んでいました。その笑顔を見ていたら、あの時私



の発言を自分の事のように喜んでいる波多野さんの笑顔と重なって見えました。

自信がなかった私の成長を感じ、喜んでくれた波多野さん。私の中で「人は皆可能性があるんだ」と感じさせてくれる出来事でした。

そして、そのように人の可能性を自然に引き出す事のできる人は、そうそういません。誰もが自分の可能性に気付いて、それが仕事でも日常でも活かされたら、どんなに幸せなんだろうと思います。

## 波多野さんを一言で表すと、生命力あふれる人

波多野さんによく「どこでも生きていける様な人間になるんだぞ」と言われています。

私は単純に、家がなくても、どこでも寝られる強い子になりなさいと受け取って、すぐに寝袋を購入し、いつか野宿を試してみようと思っていました。

阿蘇から熊本市内に月に何回か習い事のため出ていたの、寝袋を持って阿蘇を出ます。でも、結局熊本にいる姉に反対され、姉の家に泊まり野宿することはありませんでした。



今になって思うと、「どこでも生きていける人」とは、どんな環境でも柔軟に対応できることを言うのかなと思います。

私はアトピーなので今は外食なども気を付けていますが、いつ何が起るかわからないこの時代、何でも代謝して何でも食べられる力こそが、生命力のある体なのかもしれません。好んで添加物の入っているものやマ

ックは食べないけれど、たまには地元の子と大笑いしながら食べるジャンクフードもいいんじゃないかと思うようになりました。

昔は食に対しガチガチだった私も、少しずつ柔軟になりました。6年を経て、あの時の言葉の意味が分かった気がします。

それを教えてくれた波多野さんの柔らかく、たおやかな人柄や世界観を、多くの人とシェアしたくて、今回9月14日(木)にイベントを開催する運びとなりました。

この講演を快く承諾して下さいました社長の柔軟な心に感謝、チラシを制作してく

れた方にも感謝、読んでくださった方にも感謝です。ありがとうございました。

当日、皆さまとお会いできる事を心より楽しみにしています。

